

序：文脈—過越の小羊の屠られるべき日が来た

今日の箇所は「過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た」という言葉で始まっています。これは22章1節の言葉「さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた」とつながっています。過越祭と除酵祭は別々のお祭りでしたが、当時のユダヤ人たちは二つを一つのもの、つながったものと見なしていました。ですからルカも「過越祭と言われている除酵祭」と記しているのです。それはどちらもイスラエルがエジプトという奴隷の家から救い出されたことを記念するお祭りでした。ユダヤ人の暦でニサンの月の14日に小羊を屠り、その日の夜に家族で過越の食事をとります。その日から1週間除酵祭（種なしパンの祭り）が続くのです。

そのような除酵祭が近づく中、主イエスを殺そうする策略が進められていきました。最初祭司長や律法学者たちは民衆を恐れてイエスを殺すことをためらっていました。しかし12弟子のユダの裏切りによって、殺害計画は前へ進みだしたのです。ユダは「群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらう」ようになりました。そのようにしてイエスを殺す準備が敵の側で整っていったのです。

そして今日の箇所について「過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た」わけです。マルコ福音書の並行箇所では「過越の小羊を屠る日」となっているのに対して、ルカでは「屠るべき日」となっています。「～すべき、～しなければならない」という言葉が加わっているのです。この日に小羊を屠るべきことは律法で定められてきましたから、このように記されているのでしょうか。しかしルカがこの言葉を付け加えた意図はそれだけではないと思います。この「～しなければならない」という言葉は、イエス様のご自分の受難を予告される際に使われていました。受難予告は何度もされましたが、第一回目は次のような言葉でした。

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」（ルカ 9:22）

ここで「必ず～することになっている」というのが、今日のところで「過越の小羊が屠られるべき日、屠られなければならない日」という表現でも使われているのです。それゆえここですでにイエス様こそが除酵祭において屠られなければならない小羊であるということが暗示されています。実際パウロも「キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られた」（Iコリント 5:8）とはっきり語っています。

しかしその前にイエス様はご自分の弟子たちと過越しの食事をとられました。いわゆる最後の晩餐と呼ばれているものです。そして今日の箇所にはその最後の晩餐、過越の食事の準備について記されています。

1. 過越の食事の準備

ではその過越の食事の準備とはどのようなものだったのでしょうか。その食事はエルサレムで取るべきものでしたから、まずエルサレムの中で食事をする部屋を確保する必要がありました。そして傷のない小羊を購入し、神殿で屠り、それを焼きます。それ以外にも酵母のっていないパン、苦菜、ぶどう

酒を用意する必要がありました。今日の箇所にはそのような具体的な食事の準備については詳しく記されていません。ただ最後の 22 章 13 節で「二人が行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した」と言われているだけです。今日の箇所の中心は、弟子たちがどのようにして過越の食事をする部屋を確保したのか、ということです。もっと正確に言うならば、イエス様がそのことについてどのように指示を出されたのが今日の御言葉の中心になっています。

・ペトロとヨハネに対する主イエスの指示

まず 8 節には次のようにあります。

「イエスはペトロとヨハネとを使いに出そうとして、「行って過越の食事ができるように準備しなさい」と言われた。」

何気なく読んでしまうようなところですが、ここもマルコ福音書の並行箇所と比べるといくつかのことに気づかされます。マルコの方ではイエス様が「二人の弟子を使いに出された」（14:13）となっていますが、ルカではその「二人」がペトロとヨハネであったことが明示されています。ペトロとヨハネと言えばイエス様の 12 弟子の中でも最も中心的な弟子です。ペトロとヨハネが弟子たちの中のトップ 2 とも言えるでしょう。使徒言行録の中でもこのペトロとヨハネが使徒たちの代表として重要な役割を果たしています。そのような「ペトロとヨハネ」をイエス様は選んで、使いに出されたのです。それはこの過越の食事の準備がそれほど重要な任務であったことを示しています。誰がやってもいいような単なる食事の準備とは違っていたのです。

またイエス様と弟子たちとのやり取りですが、マルコでは弟子たちの方からイエス様に「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と尋ねています（マタイでも）。しかしルカ福音書では弟子たちからではなく、イエス様の方から弟子たちに「行って過越の食事ができるように準備しなさい」と指示を出されるのです。このようにルカ福音書ではイエス様が主導権を握り率先して過越の食事の準備を進めていかれたということが強調されています。

・食事をを用意する場所についての主イエスの指示

さてイエス様から過越の食事を準備するよう言われたペトロとヨハネはイエス様に尋ねました。

「どこに用意いたしましょうか。」

当時、過越祭のときにはエルサレムの住人は巡礼でやってきた人々に無償で食事のための部屋を貸してあげる慣習があったようです。お金は受け取らず、ただ屠った小羊の皮だけを受け取るようになっていたそうです。その意味ではイエス様の一行にも部屋を貸してくれる人はいたはずですが、しかし過越祭のときのエルサレムは多くの巡礼者でごった返していました。すでに多くの部屋は埋まっていたでしょう。そのような中で過越祭の当日に部屋を探そうとしても難しいことなのだと思います。それは例えば忘年会で居酒屋がにぎわっている年末に、大人数で宴会をする居酒屋を当日見つけるようなものかもしれません。それはなかなか難しいことです。本来であれば事前に予約をしておくべきです。しかしこのとき少なくとも弟子たちは過越祭の当日になっても自分たちがどこで食事をするのか分かっていなかった、知らなかったのです。それでイエス様に「どこに用意いたしましょうか、どこに用意することをあなたは望まれますか」と尋ねたのです。

それに対するイエス様の答えは次のようなものでした。10 節から。

「イエスは言われた。「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う。」

当時水がめを運ぶのは女性の仕事でした。ですから「水がめを運んでいる男」は珍しく、それだけで目印になったのです。イエス様は続けてこう言われました。

「その人が入る家までついて行き、家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています。』すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしておきなさい。」

そして実際「二人が行ってみると、イエスが言われたとおりにだったので、過越の食事を準備した」と13 節で言われています。

このような準備のさせ方は、イエス様がエルサレムに入られる前、やはり二人の弟子を遣わしてご自分が乗る「ろば」を用意させたことを思い起こさせます (19 章 28-35 節)。

今日のところで問題になるのは、イエス様はこのようなことを預言者としての予知能力で行なったのか、それとも弟子たちが知らない間に事前に準備・手配をされていたのか、ということです。これはどちらかはっきりとは分かりません。

しかしイエス様は弟子たちに、家の主人には『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています』と言うよう指示なさいました。そしてこの言葉を聞いただけで主人はピンときて、席の整った広間を見せてくれたのです。この家の主人が「先生」と聞けばイエス様のことだとわかったのでしょうか。その意味でこの主人も弟子の一人であったのかもしれませんが。そう考えるとイエス様は事前に弟子たちには内緒でこの人に過越の食事のための部屋を提供してくれるよう頼んでいたのではないかと、思われます。

では「水がめを運んでいる男」についてはどうでしょうか。これも「水がめを運んでいる男」が都への入り口で待っているよう打ち合わせをしていたのかもしれませんが。しかし、これに関してはイエス様の預言者として予知能力だった可能性もあると思います。サムエル記上 10 章 1 節からの箇所には、預言者サムエルがサウル王に対し、「あなたはこういう人たちに出会います。出会ったらこうしなさい」と指示をする場面があります。そして実際そのようなしるしがすべて起こったと言われています

(10:9)。そのような旧約聖書の背景を考えると、イエス様が弟子たちに「水がめを運んでいる男に出会うから、彼について行きなさい」と指示されたのは預言者としての予知に基づくものだったと考えるべきかもしれません。

イエス様はそのように預言者として予知によって、あるいは事前にご自分で準備と手配をなさることによって、このような指示を弟子たちに出し、実行させられたのです。

2. このような準備のやり方をされた目的

しかしなぜイエス様はこのようなまどろっこしい (回りくどい) やり方はなさったのでしょうか。一番シンプルなのは、事前に弟子たちに食事の部屋を確保 (予約) させ、当日そこに食事の準備をさせることです。しかし、イエス様はそうはされず、過越祭当日まで弟子たちは誰もどこで食事をするか知らなかったのです。また「どこに用意いたしましょうか」と弟子たちが尋ねた際も、もしその家の主人がイエスの弟子であれば、ペトロやヨハネも知っていたのではないのでしょうか (マタイ 26 章 18 節参照)。

この家は使徒言行録 12 章 12 節に出てくるマルコと呼ばれていたヨハネの家ではないかと言われてきました。そうでなくても弟子であれば、「弟子の誰その家に食事を準備を下さい」と言えば分かったのではないのでしょうか。しかしイエス様はそうはなさらず、ただ「水がめを運んでいる男」を目印として与え、彼について行くようにされました。そうして到着してはじめてペトロとヨハネはどの家で食事をするのかを知ったのです。

イエス様がそのようになされた理由、それは 22 章 6 節にあります。ユダは群衆がいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会を狙っていました。そして過越の食事の時というのは、エルサレム中の人々が家の中に入り、食事をしますから、群衆はいなくなります。それゆえイエス様が過越の食事をする時というのはイエスを捕らえ、引き渡すために絶好の機会だったはずで、イエスがどこで過越の食事をなさるか情報がユダから祭司長たちに渡れば、その時に捕らえられてしまう可能性がかなりあったのだと思います。イエス様はそれを防ぐために、過越祭当日まで弟子たちを含め誰にもどこで食事をするかということをしらせなかったのだと思います。また当日も「誰その家に準備を下さい」と言わなかったのも同じ理由でしょう。準備に遣わされたペトロとヨハネだけが水がめを持った男について行った結果、初めて場所を知ったのです。ユダを含めた他の弟子たちにはこの時点でもまだ知らされず、彼らはその場所を知ったのは本当に食事の直前だったのだと思います。こうしてイエス様は弟子たちと共に過越しの食事をするのを敵に妨げられないように、邪魔されないように、あえてこのような回りくどい仕方で過越しの食事を準備させたわけですね。

そこには 22 章 15 節で「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」というイエス様の強い思いが現れています。イエス様は敵に妨害されず、何とんでもこの過越の食事を弟子たちとしたいと切に願っておられたのです。

それはなぜでしょうか。これはまた来週以降学ぶことになりますが、この過越しの食事はイエス様と弟子たちにとってただの食事ではありませんでした。その食事の席でイエス様はご自分の死の意味を弟子たちにお教えになったのでした。そしてご自分の死を記念するための聖餐式を制定なされたのです。イエス様はご自分が捕らえられ、殺される前に、そのことをどうしても弟子たちに伝えておく必要があったのです。しかもただ言葉だけによらず、この過越の食事を通してご自分の死の意味を伝える必要がありました。そして弟子たちが世々にわたって守るべき聖餐式を制定する必要があったのです。イエス様の死にどのような意味があったのかそれはまた来週以降詳しく学んでいきたいと思いますが、すでに今日の箇所でも明らかになっていることがあります。それはすでに申し上げましたように、主イエスが過越の小羊として屠られなければならなかった、ということです。過越の小羊はイスラエルが救われるために必要な犠牲でした。それと同様に主イエスは私たちが救われるために、過越しの小羊として殺されなければならなかった、犠牲にならなければならなかったのです。聖餐式はまさにそのことを主イエスの死が私たちの救いのためであったことを繰り返し思い起こし、その恵みを味わう礼典です。

コロナの影響でしばらく聖餐式ができない状況が続いています。しかしその重要性が変わることはありません。イエス様は聖餐式を制定するために、周到な準備をし、敵に妨害されない仕方で過越しの食事を準備されたのでした。それほどそれは主にとってなくてはならない食事だったのでした。主イエスに感謝しつつ、聖餐式を大切なものとして守り続けていきたいと思っています。